

平城京左京三条二坊一・二坪（平城宮跡第190次）発掘調査 井上和人  
現地説明会 資料 1988.11.5  
奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部  
調査期間 1988.10～  
調査面積 190次地区-2800㎡、八坪北東隅地区-400㎡

### 1 はじめに

そごうデパート建設予定地に関する発掘調査は、1986年10月に着手して以来、すでに2年を過ぎた。調査総面積は、今回の分を合わせると、約23000㎡にのぼる。調査は、およそ3000㎡ごとに進めてきているが、調査成果を報告する説明会も今回で6回目になる。

### 2 これまでの調査の成果の概要

これまでの調査で、平城京左京三条二坊の七坪のほぼ全域を発掘し、また一、二、八坪に関しても一部調査を進めた。みつかった建物、溝、塀、道路、井戸などの遺構は300近くにおよぶ。これらはいずれも奈良時代から平安時代の初頭にかけてのもので、大きくA期～D期の4期に分けることができる。

#### A 期

奈良時代前半にあたる。出土した多量の木簡により、長屋王邸の跡であることが確かめられた一・二・七・八坪の4町（約250m）を占める広大な宅地の時期。敷地内には長大な掘立柱塀により、いくつかの大きな区画が設けられる。

#### B 期

奈良時代中頃にあたる。坪と坪の間に小路がつくられ、A期には4町規模であった敷地が1町以下の敷地に分割され、七坪内には小規模な掘立柱建物が散在する。いっぽう、二坪は一町規模の宅地となり、大規模な建物が並び立つ。

#### C 期

奈良時代後半にあたる。坪境の小路が埋め立てられ、2町以上の広い敷地となる。比較的大規模な掘立柱建物が配置される。

#### D 期

奈良時代から平安時代初頭にかけての時期。再び坪境小路をつくり、1町（以下）の規模の敷地に分割される。七坪内には小規模な建物が散在する。二坪は1町規模の敷地で、大規模な建物が立てられる。こうした状況はB期と似ている。

### 3 今回の調査の概要

#### ①第190次調査区

今回調査をすすめている場所は、一坪と二坪の坪境付近にあたる。検出した遺構は掘立柱建物10、掘立柱塀5、坪境小路1、井戸1、池状遺構1である。

今回の調査では、とくに長屋王邸の時期に、敷地の西北に大きな区画のあったことが確かめられた。この区画内の南辺に近い場所に、建物内部をいくつかの部屋に仕切った非常に長い東西棟が見つかった。これは事務管理的な性格をもった建物とみなすことができ、これまでに確認されている敷地内の他の区画の内部の様子とは異なっていることが注目される。

なお各遺構の所属時期については、まだ調査の途中ということもあり、十分に確定していない。以下、主要な遺構について簡単な説明をしておこう。

#### 建物01……C期

今回あらたに検出したのは、東西方向の掘立柱列で、10尺（3.0m）等間で5間分。前回の調査区で見つかっている柱穴群と一連のものとする、全体で東西60尺（約18m）、南北80尺（約24m）という大きな規模の建造物になるが、具体的な構造についてはまだ不明。

#### 坪境小路03……B期およびD期

一坪と二坪の間につうじる小路。南側溝02と北側溝04をともなっており、道路の規模は、側溝の中心間の距離で20尺（約6m）ある。

#### 東西塀05・南北塀12……A期

長屋王邸の敷地内を区画する掘立柱塀で、T字形に接続している。東西塀05は今回の調査区では23間分ある。これまで確認されている分を合わせると、東の端から48間・約130mの長さにもおよんでおり、さらに西方にのびるものとおもわれる。柱間寸法は9尺（2.7m）等間。南北塀12は10間分を確認し、前回の検出分をあわせると、およそ67m分を検出したことになる。

#### 建物09……A期

桁行16間、梁間2間の身舎に南廂のつく東西棟。柱間は9尺（2.7m）等間。建物の総長は、144尺（42.6m）ある。身舎の内部には、2間ごとに間仕切りの柱穴があり、八つの部屋に壁で分けられた建物であったことがわかる。

このような長い建物は平城京内ではほかに例がなく、またいくつもの部屋に分割されている点でも非常に注目される。すぐ西に倉庫の建物20のあることから考えると、家政機関のうちの物資を管理する事務所のようものが集合していた建物の一つではないかと想像される。

#### 建物10……C期か？

建物09よりも新しい時期の東西棟。建物方位が東で北に大きくふれている。桁行が13間あり、総長106尺（31.4m）。梁間は2間で6尺（1.8m）等間。  
\*東西塀07は、建物10の南12尺（3.6m）の位置に平行してつくられているので、南廂あるいは縁側の床束柱かもしれない。

#### 建物13……B期

4×2間の南北棟。8.5尺（2.25m）等間。

#### 建物14……C期か？

5×2間の東西棟。桁行9尺（2.7m）等間。梁間7尺（2.1m）等間。

#### 建物15……A期

9間以上×2間の大規模な東西棟。東3間より西に南廂が付く。身舎10尺（3.0m）等間。廂の出9尺。

#### 建物17……B期もしくはD期

3×2間の東西棟。6尺等間。

#### 建物18……C期か？

3以上×2間の東西棟。桁行10尺等間。梁間6尺等間。建物10と同様に、建物方位が東で北に大きくふれている。

#### 池状遺構19……奈良時代末期に埋没

東西10m、南北15mの長方形の落ち込み。

倉庫20……南北3間、東西2間以上の総柱建物。柱間は6尺等間。高床の倉庫と考えられる。

②八坪東北隅の調査

二条大路の南側溝と、東二坊坊間路の西側溝の合流点付近の遺構を検出した。二条大路南側溝は幅2.6 m、深さが0.9 mあり、中層の木屑層、粘土層から木簡や土器がまとまって出土しており、現在なお発掘中である。

坊間路西側溝の西側には、長屋王邸の東を限る南北塀があるが、この塀は北辺にはめぐらない。二条大路の南側溝・東二坊坊間路の西側溝と宅地の間には雨落ちの溝があり、宅地東北隅には、築地の下をくぐってこれに注ぐ木樋暗渠がある。

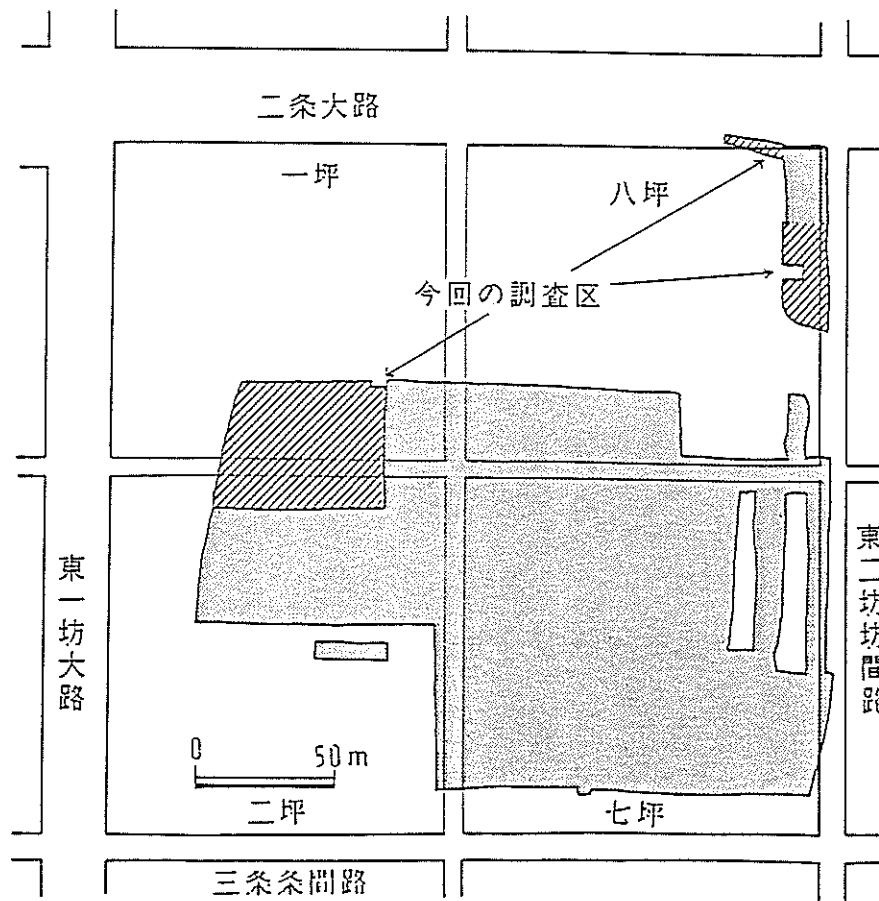
③出土木簡について

東二坊坊間路西側溝……年記のあるものは和銅8年(715)から天平元年(729)であるが、天平元年の木簡が多い。

1は、長屋王の変(神亀6年2月)の半年の後、「天平」への改元があり(8月5日)、木簡はその直後の日付をもつ。「将曹」という官職から考えて、木簡の差し出し人は、神亀5年に設置された中衛府に所属していた人物であろう。

二条大路南側溝……荷札木簡の割合が高く、完形の木簡も多い。年記は今のところ天平7~9年(735~737)に限られる。

6は、門の守衛にあたった氏の名前を書いた木簡であるが、ここに「皇后宮」とあるのが注目される。天平7・8年当時の皇后は聖武天皇の皇后の光明皇后である。その邸宅は、のちに法華寺となるから、皇后宮は現法華寺に比定できる。従って、この文書木簡は、法華寺のあたりから溝づたいに南流してきたものかもしれない。

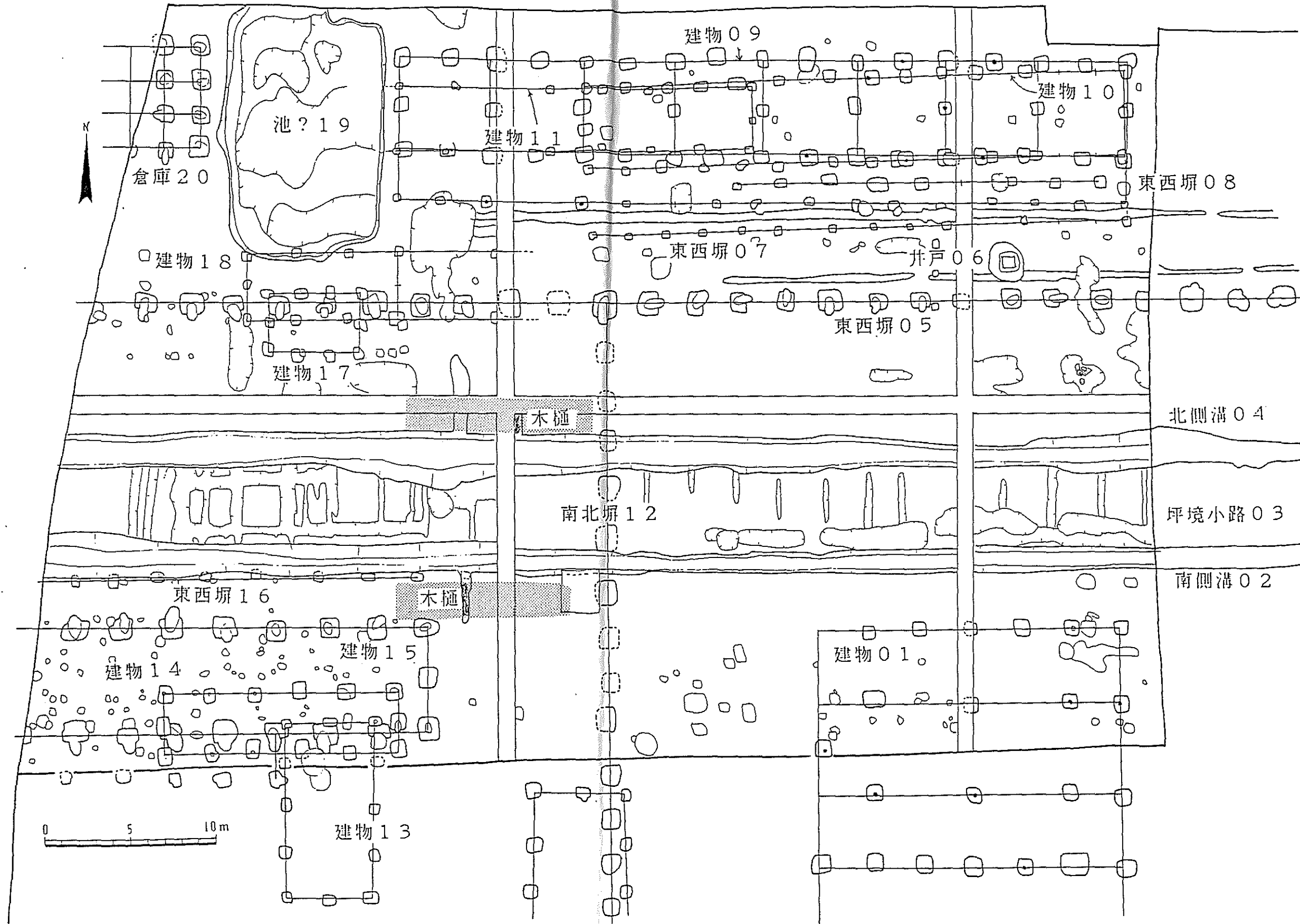


坊間路西側溝出土木簡釈文

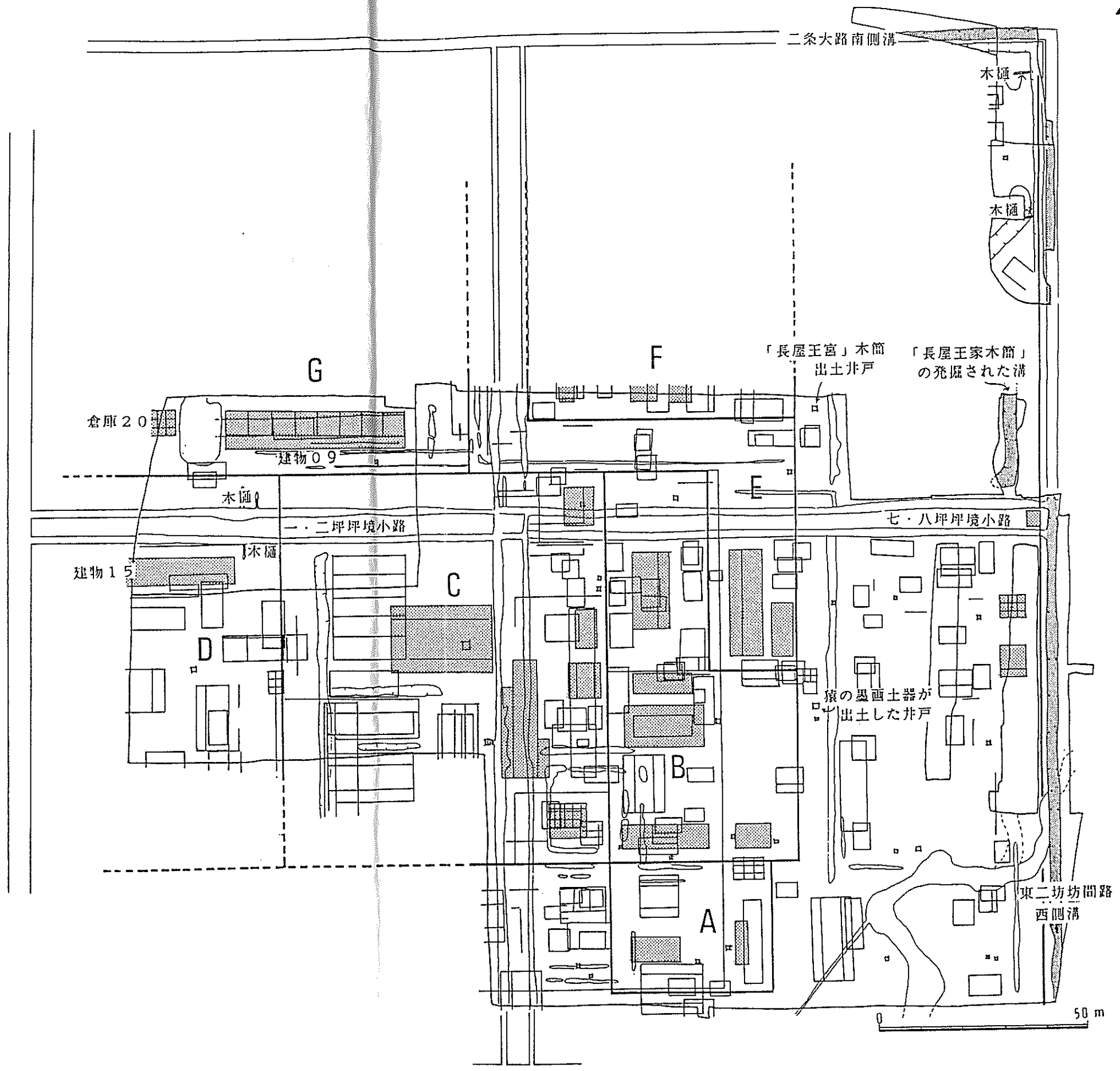
- 1. 謹啓 厨務所 □本清二升許  
 ・右為薬分之 天平元年八月十八日 将曹若庶 大箇 207・29・3
- 2. 若狭国遠敷郡青郷御贄始貞富□并作  
 □□  
 □塀也 148・27・3
- 3. □易感府 府交  
 □遣交易  
 □交易 交易 (耳の絵の上に重ね書き)  
 □渤海使 遣 交易  
 易 交易 交易  
 ・(人面3、耳2の絵の上に「天」「地」の文字を重ね書き) (80)・85・7

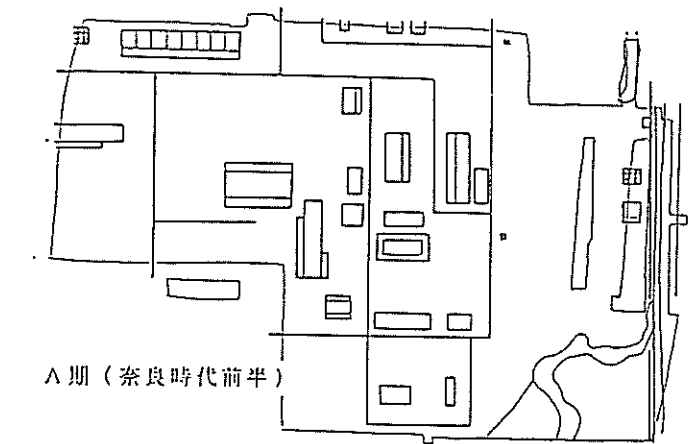
二条大路南側溝出土木簡釈文

- 4. 隱岐国周吉郡 新野郷丹志里宗我部 天平七年 158・23・4  
 阿久多調鳥糞六斤
- 5. 伊豆国賀茂郡賀茂郷題詩里戸主矢田部刀良麻呂矢田部刀良調荒壁魚 二  
 二十二斤十兩十一連二丸  
 天平七年十月 382・39・3
- 6. 一兩 佐伯 皇后宮 □□ □□  
 下野 鴨山 合七人 180・30・1
- 7. 岡本宅 進上粟子一升二合  
 天平八年八月七日 □□ 久世 万呂 171・33・4

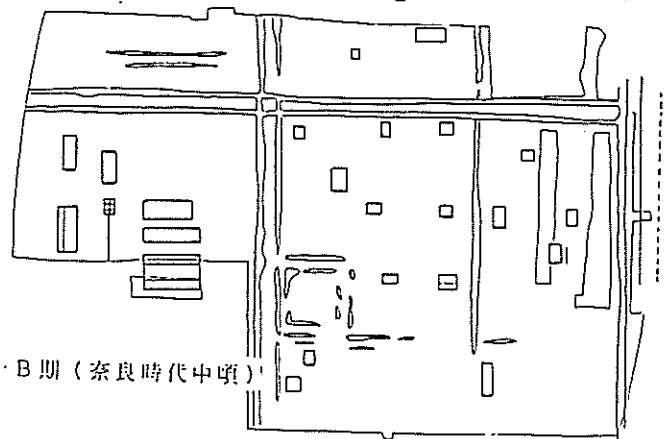


遺構全体図

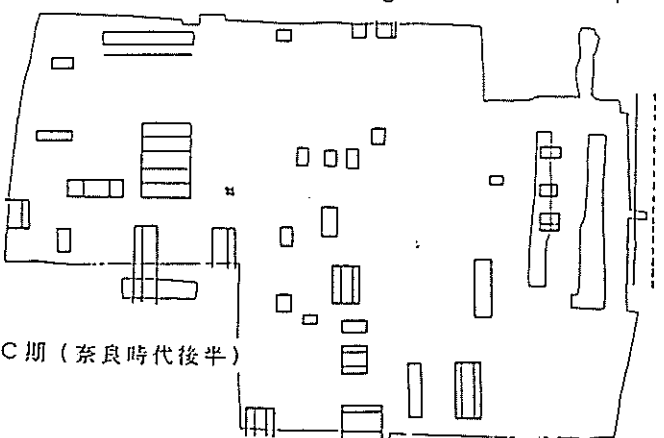




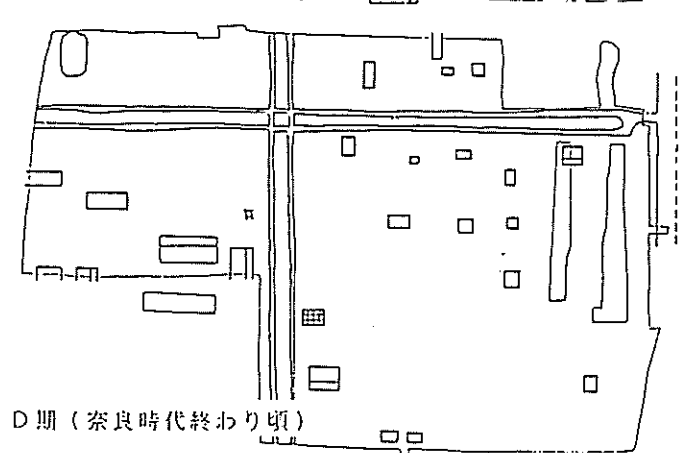
A期 (奈良時代前半)



B期 (奈良時代中頃)

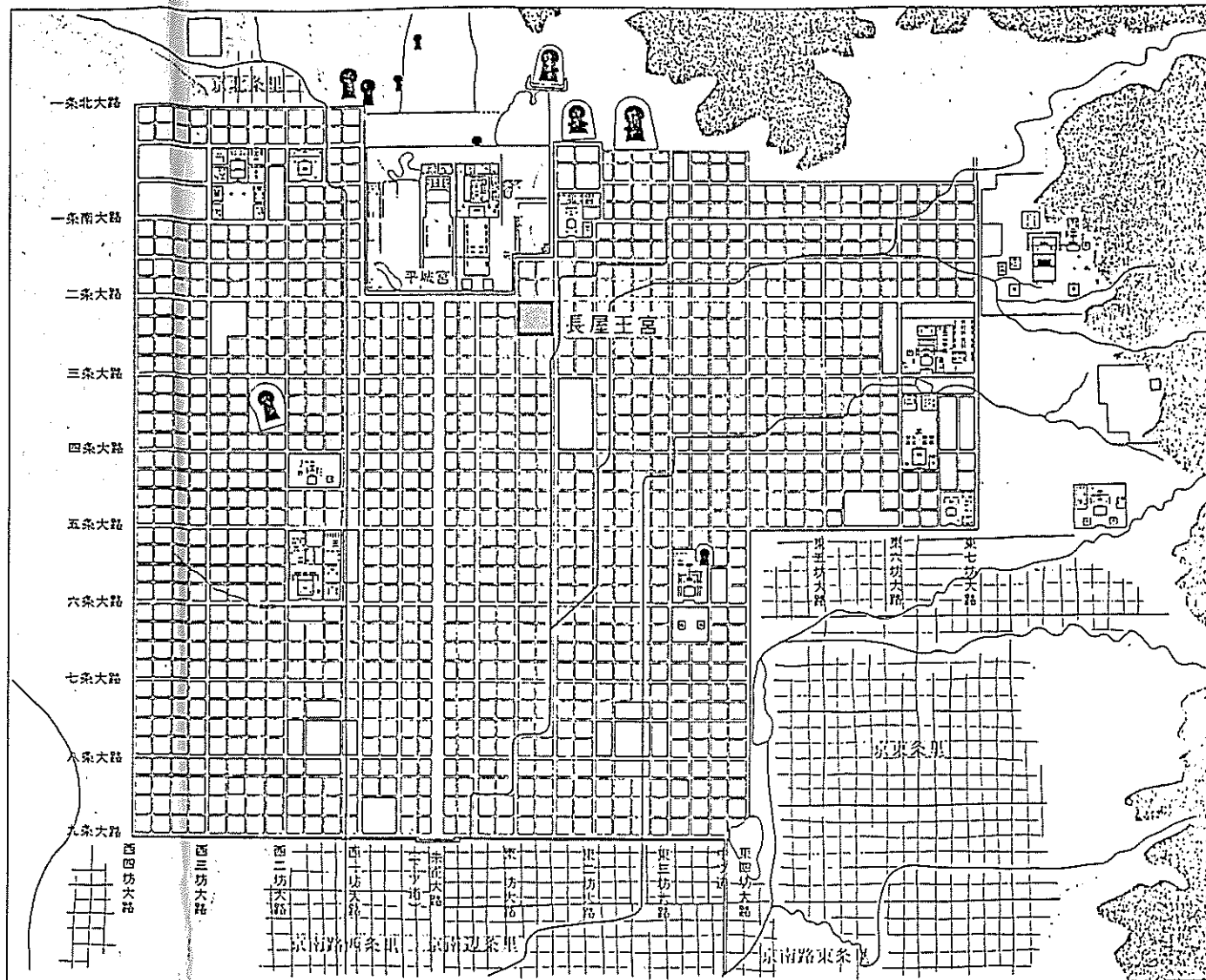


C期 (奈良時代後半)



D期 (奈良時代終わり頃)

遺構変遷図



平城京条坊図 (縮尺4万5000分の1)

